丹　羽　英　人　教授

学歴

1965 年３月　名古屋大学医学部医学科卒業
1965 年４月　国家公務員共済組合名城病院にて医学実地修練（1966 年３月まで）
1966 年５月　医師国家試験合格、医師免許取得
1966 年４月　名古屋大学大学院医学研究科入学
1970 年３月　同　　修了　（医学博士の学位取得）
1983 年３月　日本耳鼻咽喉科学会認定専門医
1985 年 10 月　日本気管食道科学会認定医

職歴

1970 年４月　名古屋大学医学部助手耳鼻咽喉科学教室（1972 年９月まで）
1972 年９月　愛知県済生会病院耳鼻咽喉科部長（1975 年９月まで）
1975 年９月　名古屋大学医学部助手耳鼻咽喉科学教室
1978 年５月　名古屋大学医学部講師
1980 年９月　文部省在外研究員として米国セントルイス市ワシントン大学生物学部にて研究に従事（1981 年８月まで）
1991 年３月　名古屋大学医学部助教授。（1991 年７月まで）
1991 年７月　国立名古屋病院耳鼻咽喉科医長（2001 年３月まで）
2001 年４月　独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター耳鼻咽喉科部長（2004 年３月まで）
2004 年４月　愛知淑徳大学医療福祉学部医療貢献学科言語聴覚学専攻教授（2014 年３

月まで）
2014 年３月　愛知淑徳大学定年退職

学会及び社会活動

1979 年４月　日本耳鼻咽喉科学会愛知県地方部会理事及び社会医療委員会委員（2004 年 3 月まで）
1983 年４月　日本耳鼻咽喉科学会愛知県地方部会学術委員（2004 年 3 月まで）
1983 年 10 月　日本聴覚医学会評議員（2006 年 9 月まで）
1985 年１月　日本耳科学会評議員（2004 平 12 月まで）
1991 年７月　日本耳鼻咽喉科学会評議員（2009 年 6 月まで）
1991 年７月　日本耳鼻咽喉科学会東海地方部会連合講演会運営委員（2004 年 3 月まで）
1992 年７月　日本耳鼻咽喉科学会専門医制度常任委員（1996 年 6 月まで）
1994 年１月　日本聴覚医学会企画委員会委員（1998 年 12 月まで）
1998 年７月　日本耳鼻咽喉科学会学術委員会委員（2002 年 6 月まで）
2004 年７月　愛知県耳鼻咽喉科医会顧問（現在に至る）
2009 年７月　日本耳鼻咽喉科学会参与（現在に至る）

主な著書・論文

主な著書

1.『日本気管食道科学会講習会テキスト』（共著）金原出版　1988
2.『脳神経外科学』（共著）金原出版　1989
3.『耳鼻咽喉科診療マニュアル』（共著）金原出版　1990
4. *Transplants and Implants in Otology II*（共著）Kugler Publications　1992
5.『耳鼻咽喉科領域の臨床 CLIENT21』（共著）中山書店　2000
6.『今日の耳鼻咽喉科・頭頸部外科治療指針』（共著）医学書院　2004
7.『今日の治療指針』（共著）医学書院　2005
8.『聴力改善手術』（共著）医学書院　2005

主な論文

1.「内耳液より見た内耳炎」（共著）『耳鼻と臨床』16 巻　1970
2.「耳管機能より見た鼓室形成術の適応及び予後に関する研究」『日本耳鼻咽喉科学会会報』75 巻　1972
3.「Weber-Christian 病 —免疫抑制剤による治療と成因の考察—」（共著）『耳鼻咽喉科』45 巻　1973
4.「突発性難聴に対する高気圧酸素療法」（共著）『耳鼻咽喉科』45 巻　1973
5.「頭部外傷による聴覚障害の蝸電図」『オージオロジージャパン』21 巻　1978
6.「上顎洞粘膜を利用した眼窩嚢再建術」（共著）『臨床眼科』35 巻　1981
7.「猫蝸牛ニューロンによる 2 音刺激の時間的効果の研究」（共著）『日本耳鼻咽喉科学会会報』84 巻　1981
8.「蝸電図による聴神経腫瘍の診断と術後経過の観察」『現代医学』　1983

9. Representation of Biosonar Information in the Auditory Cortex of the Mustached bat, With Emphasis on Representation of Target Velocity Information. （共著） *Advances in Vertebrate Neuroethology* 56. 1983
10.「マウスの脳幹部聴覚路の発達に関する生理学的組織学的研究」（共著）『日本耳鼻咽喉科学会会報』87 巻　1984
11.「難聴」『小児医学』17 巻 4 号　1984
12. Response Properties of FM-FM Combination Sensitive Neuron in the Auditory Cortex of the Mustached Bat. （共著） *J. Comp. Physiol. A.* 159. 1985
13. The Personalized Auditory Cortex of the Mustached Bat: Adaptation for Echolocation. （共著） *J. Neurophysiology* 58. 1985
14.「進展せる鼻咽腔血管繊維腫の取り扱い」『耳鼻咽喉科臨床』 81 巻　1986
15.「中耳腔貯留液ＰＯ2 値と耳管機能」『耳鼻咽喉科臨床』　補 20 巻　1986
16.「他覚的内耳機能評価法として誘発耳音響放射」（共著）『日本耳鼻咽喉科学会会報』 92 巻 1987
17.「顔面に発生した Fibromatosis の一例」（共著）『耳鼻咽喉科臨床』81 巻　1988
18.「突発性難聴の治療」（共著）『耳鼻咽喉科臨床』82 巻　1989
19.「老人性難聴」『日本老年医学会雑誌』27 巻　5 号　1989
20. PO2 Levels in Middle Ear Effusions and Middle Ear Mucosa.（共著） *Acta Otolaryngol Suppl.* 471. 1990
21. Evaluation of Clearance Function of the Eustachian Tube by Sequential Contrast CT. *Acta Otolaryngol. Suppl.* 471. 1990
22. Spectral Analysis of Airflow Sounds in Patent Versus Occluded Tracheostomy Tubes: A Pilot Study in Tracheostomized Adult Patients.（共著） *Laryngoscope* 100. 1990
23.「扁桃周囲膿瘍における検出菌と治療」（共著）『耳鼻咽喉科臨床』83 巻　11 号　1990
24. Factors Affecting Improvement of Hearing After Stapes Surgery. *Auris・Nasus・Larynx* 19. *Suppl.* 1. 1992
25. Survey of Patients With Tracheobronchial and Esophageal Foreign Bodies.（共著） *Auris・Nasus・Larynx* 19. *Suppl.* 1. 1992
26. Subcortical hearing Disorders: Report of 2 Cases.（共著） *Auris・Nasus・Larynx* 19. *Suppl.* 1. 1992
27. Improvement in Hearing and Incidence of Complications Following Three Types of Stapes Surgery. （共著） *Auris・Nasus・Larynx* 19. *Suppl.*1 1992
28.「アデノイド切除術・扁桃摘出術」『JOHNS』8 巻 10 号　1992
29.「中耳拡大断層撮影によるセラミック人工耳小骨の挿入位置の検討」（共著）『日本耳鼻咽喉科学会会報』95 巻　1992
30.「突発性難聴と耳鳴」『JOHNS 』9 巻 1 号　1993
31.「小児真珠腫の手術所見と術後成績」（共著） *Otol Jpn* 3 巻 2 号　1993
32.「誘発耳音響放射を指標とした forward masking」（共著）『日本耳鼻咽喉科学会会報』97 巻 1993
33.「誘発耳音響放射による突発性難聴の経過観察」（共著）『オージオロジージャパン』38 巻 3 号　1995
34.「耳硬化症手術例の検討」（共著）『耳鼻咽喉科臨床』88 巻 2 号　1995
35. A Case of Allergic Aspergillus Sinusitis with Acute Onset.（共著） *Auris・Nasu・Larynx*

22　1995

36.　HLA Associations in Otosclerosis in Japanese Patients.（共著）*Eur Arch Otorhino-laryngol* 253.　1996

37.「唾石の手術（口内法）」（共著）『耳鼻咽喉科・頭頸部外科』68 巻別冊　1996

38.「小児先天性耳小骨奇形の検討」（共著）*Otol Jpn* 14 巻 3 号　2003

39.「耳硬化症」『耳鼻咽喉科・頭頸部外科』77 巻 5 号　2005

40.「アブミ骨手術の長期成績」（共著）*Otol Jpn* 16 巻 1 号　2005

その他の業績

1.『蝸電図による突発性難聴の障害部位診断に関する研究』（共著）突発性難聴の疫学・病因に関する調査研究斑昭和 50 年度研究業績集　1976

2.『特発性両側性感音難聴の蝸電図について』（共著）特発性両側性感音難聴調査研究斑昭和 51 年度研究業績集　1977

3.『特発性両側性感音難聴の蝸電図による障害部位の検討』（共著）特発性両側性感音難聴調査研究班昭和 52 年度研究業績集　1979

4.『聴覚機能及び前庭機能より見た脊髄小脳変性症』 脊髄小脳変性症調査研究班昭和 54 年度研究業績集　1980

5.『皮質下中枢性難聴の一症例』（共著）急性高度感音難聴調査研究班昭和 58 年度研究業績集　1984

6.『ムンプス難聴の検討』（共著）急性高度感音難聴昭和 58 年度研究業績集　1984

7.『内耳気圧性外傷—特に EP について—』（共著）急性高度感音難聴調査研究班昭和 59 年度研究業績集　1985

8.『内耳気圧外傷の臨床例』（共著）急性高度感音難聴調査研究班昭和 61 年度研究業績集　1987

9.『幼児期に発症した語聾と思われる症例』（共著）急性高度感音難聴調査研究班昭和 63 年度研究業績集　1989

10.『急墜型突発性難聴とその予後』 急性高度感音難聴調査研究班平成元年度研究業績集　1990

名　誉　教　授　推　薦　書

丹羽　英人　先生

（健康医療科学部医療貢献学科言語聴覚学専攻）

丹羽英人教授は、平成 16 年 4 月、愛知淑徳大学医療福祉学部医療貢献学科言語聴覚学専攻教授として着任され、平成 20 年 4 月から平成 22 年 3 月まで、医療福祉学部医療貢献学科主任を務められ、学科の教育の充実、運営に尽力されました。また、平成 18 年 4 月に開設された愛知淑徳大学大学院医療福祉研究科の開設メンバーとして教授に就任され、修士の研究教育に尽力されました。

平成 18 年に開設された愛知淑徳大学クリニックでは、耳鼻咽喉科の開設の中核を担われ、ご自身も医師として、地域の耳鼻咽喉科医療に貢献されました。

研究者としては、昭和 45 年 3 月、名古屋大学大学院医学研究科修了と同時に医学博士を取得され、昭和 47 年 9 月愛知県済生会病院耳鼻咽喉科部長、昭和 50 年 9 月名古屋大学医学部耳鼻咽喉科教室助手、昭和 53 年 5 月同講師、平成 3 年 3 月同助教授、平成 3 年 7 月国立名古屋病院耳鼻咽喉科医長、平成 13 年 4 月独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター耳鼻咽喉科部長を歴任されました。この間、昭和 55 年 9 月から昭和 56 年 8 月まで文部省在外研究員として、アメリカ合衆国セントルイス市ワシントン大学生物学部において研究に従事されました。丹羽英人教授は一貫して耳鼻咽喉科の医師として、また、当該分野の生理学研究者として第一線を歩んで来られ、とりわけ、難聴に関する生理学的研究、臨床治療の分野において、我が国の医療の指導的立場にあり、日本耳鼻咽喉科学会、日本聴覚医学会、日本耳科学会で要職を歴任されて来ました。

教育者としては、名古屋大学医学部では医師を目指す後進の教育に尽力され、国立名古屋病院、名古屋医療センターでは、研修医の教育に多大なる貢献を果たされました。また、本学に着任後は、耳鼻咽喉科の専門医としての、また、聴覚障害の専門家としての立場から、言語聴覚士の養成に尽力されるとともに、言語聴覚士養成のための学外臨床実習の施設開拓に大いに貢献されました。丹羽英人教授の穏やかで包容力のある人柄、そして、学問に対する情熱と真摯な態度に触れることで、多くの学生が医療の世界における専門家としての素養を習得することができ、言語聴覚士として優れた人材を多く、この地域に輩出することが出来ました。

上記により、丹羽英人教授を、本学の定める名誉教授授与の基準、愛知淑徳大学名誉教授規程第 2 条第 3 号に該当する者として推薦いたします。